

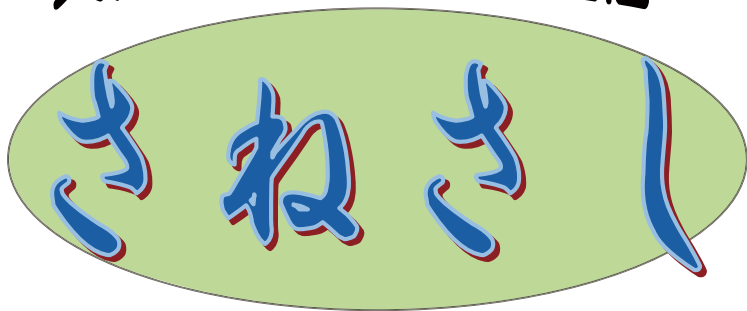


発行

平成28年12月10日
相模原市文化財調査・普及員
広報グループ

文化庁指定
文化財愛護
シンボルマーク

両手のひらと日本
建築伝統の組物を
イメージしたもの



～「さねさし」とは、相模の枕詞です～

遙かなる時空の中で、 史跡川尻石器時代遺跡

相模川が、関東山地と丹沢山地の境を狭い谷をうがちながら流れ、関東地方の平坦な相模野に移り変わるところに川尻遺跡があります。この大地には、人々が日本列島に渡り活動を始めた後期旧石器時代、2万数千年前頃から人々が現れ、これに続く縄文時代には中期から後期に大集落となり、近辺では少ない晩期まで長い年月に渡り人々の活動がありました。

またこの地は、太古から中部山岳などの山地と平野の出入口でその交通の要となりました。その交流の痕跡は、膨大な縄文土器や黒曜石など遺物として確認できます。当然、日当たり良く天災にも強い地盤、清水や作業場の谷津川、猟や採集には周辺に広がる豊かな落葉広葉樹林帯、相模川の恵みなど生活には適した環境が存在しました。

遺跡の端、相模川を望む崖上に立つと、65m下の溪谷にとうとうと相模川が流れますが、遙か昔最初にたどり着いた旧石器人は、このような風景を目にしたわけではありません。驚くことに3万年前頃の相模川は遺跡のすぐ下程度の高さに流れているという高低の少ない今と全く異なる景観でした。つまり、相模川が、最終氷河期などに下刻を繰り返し現在の深い谷を刻んだのです。時空をさかのぼれば、当地は、日本列島の基盤となった四万十帯しまんとたいに属する関東山地の小仏層（1.45から0.66億年前）上にあります。眼前には、南の海からはるかフィリピンプレートに乗って数百万年前に列島に衝突した丹沢山塊が山々になって迫り、関東山地との境目を相模川が深い峡谷をつくり流れました。当地周辺から、母なる相模川は川筋を何回も変え、当地を扇の要として広大で平坦な大地を何段もの河岸段丘として造り広げ、相模原市の主要部となる相模原面、田名原面、陽原面となりました。当地の多様な変化に富む地形は、このように壮大な大地のドラマとして出来上がったのです。

悠久の流れに触れ、この大なる自然の恵みに満ちた故郷の大切さを、この遺跡と共に思います。

(津久井班 高木)

目次	
・遙かなる時空の中で、 史跡川尻石器時代遺跡 ……	P 1
・田名向原遺跡案内・ 普及実行委員会の活動 ……	P 2
・古道地名班の活動 ……	P 2
・龍像寺の岡野氏墓地 ……	P 3
・小田急相模原駅周辺地域 の近代史を垣間見る ……	P 4



写真1 対岸より遺跡方面を望む

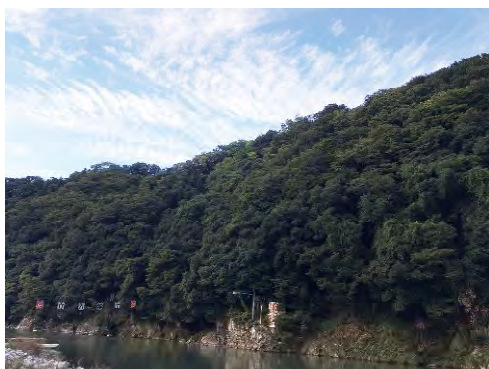


写真2 相模川の谷

田名向原遺跡案内・普及実行委員会の活動 ハテナ館まつり

私たちの実行委員会は、種々の文化財普及活動を展開していますが、今回は、毎年開催されるハテナ館まつりでの普及活動について報告します。

石蒸し料理体験など7種のイベントスタッフとして約20名を必要とし、人数確保に苦労しました。

今年は天候に恵まれ、約2,000人の来場者で賑わい、各イベントとも多忙を極め、やりがいのある活動展開でした。

今回、より遺跡のことを理解してもらうための改善に努力し、歴史的背景などのワンポイント解説を試みました。例えば、縄文時代には釣りが行われていたなどです。さらにクイズラリーでは最後に景品とともに回答を手渡し、田名向原遺跡のポイントを説明し、「もう一度回答を見直し、また来てね」を連発しました。文化財普及を強く意識して活動を行いました。

ただ、少々残念だったのは、沖縄県で世界最古の2.3万年前の貝殻を加工した

釣り針が発掘されたというニュースがもう少し早かったら、さらに盛り上がったことでしょう。

さらにもう一つ、実行委員の登録者数が減少し、現在23名です。新規普及員応募者自体が減少しており、文化都市相模原として、しっかりした戦略を立てるべきと考えます。幸いに「ドキドキ(土器土器)」や「古墳でコーフン」など考古学ブームになっている今がチャンスです。

(委員長 嶋原)



写真3 開会式の様子

古道地名班の活動 甲州道中を行くー調布・府中宿へー

古道地名班は毎月第一火曜日に例会を行っていて、現在甲州道中(街道)を歩いています。大山街道、東海道に続く長旅です。目的地を目指してただひたすら歩くのではなく、訪れた地域の歴史を学び、文化財に触れながらの寄り道しながらの旅です。

この秋は、調布市から府中市を歩いています。甲州街道(国道20号線)が整備され広い道路ができていますが、調布から府中にかけては旧甲州街道がのこっており、調布の布田五宿(市域にある五か所の宿)と府中宿では、一里塚跡や高札場や、古い家並みが残っています。調布では「郷土博物館」、府中では「ふるさと歴史館」に寄りました。調布の地名は、古代に土地の生産物を納める税の調として布を多摩川に晒して朝廷に納めたことに由来することです。府中は、武蔵国府の地、国衙(役所群)跡が発掘され、一部復元されています。街道沿いには、庶民信仰の対象の薬師堂、不動堂、地藏堂、観音堂などが祀られ、今でも地元の人々がお堂

を大切に守っています。旧集落地には、常性寺、西光寺、高安寺などの古刹や、布多天神社、大國魂神社などの古社も多く、江戸幕府から朱印地を拝領していた寺社も見られます。府中には

称名寺、長福寺という時宗の寺が二か寺あり、称名寺では、無量光寺(相模原市)と同じ一遍上人像が私たちを迎えてくれました。日野宿、八王子の横山宿へ向かって私たちの膝栗毛はまだまだ続きます。

(古道地名班 宮下)



写真4 常久の一里塚



写真5 大國魂神社

市指定史跡 龍像寺の岡野氏墓地

古淵駅至近の東淵野辺にある古刹淵源山龍像寺（曹洞宗）に江戸時代の淵野辺村を知行した旗本岡野氏一族の墓地があります。

旗本岡野氏の家系は桓武平氏維将流北条氏支流で中先代の乱の北条時行の末裔で戦国期に伊豆國中郷で田中氏を称し小田原北条氏に仕えました。三代越中守融成（号江雪）はもと密宗の僧で北条氏康に重用され、氏政近臣の板部岡能登守の遺領を継ぎ姓を板部岡にし、氏政、氏直と仕え、評定衆の一人として重きをなし外交僧として活躍しました。今年のNHK大河ドラマ「真田丸・山西惇演」にあったように沼田領問題の裁定のために上洛し、秀吉に気に入られ、北条氏滅亡後は秀吉の御伽衆となり、姓を岡野と改めた。秀吉の死後は長男房恒が仕えていた徳川家康に近侍し、関ヶ原合戦では小早川秀秋の説得に当たったということです。慶長14（1609）年に伏見で死去しています。愛刀の「江雪左文字」は後に国宝になっています。

その後の旗本岡野氏については、昭和59年墓所の前に建立された「旗本岡野家累代の墓誌」（撰文は当時の市郷土懇話会 会長金井利平氏）に次のように記されています。「前略～融成長子房恒は都築郡長津田村を所領の本貫とし千五百石を領した。次男房次は淵野辺村岡野氏の初代で家康八男徳川頼宣に仕え駿府に没した。房次の長男英明が二代を継ぎ千四百拾石余を知行し幕府の要職に就き、淵野辺村を所領の本貫として撰津国御願塚村、近江の国北脇村を保有した。以来岡野家累代の墓所は龍像寺に置かれた。英明次子貞明が三代を継ぎ幕府の要



図1 岡野家墓地配置図

職（大阪御目付代、長崎奉行）にあって千五百石を知行し、宗明以下敬明、春明、融輕、融暉、融政、融貞、克明が家督を相続し幕末に至った。明治元年の當主は岡野平次郎で淵野辺村における石高は二百七拾二石であった。英明三男友明が岡野分家として九百拾石余を領し信明以下将明、尚明、盛明、文明が相伝えて幕末に至った。明治元年の當主は岡野房太郎で淵野辺村における石高は二百七拾一石であった。」

本堂左手崖中腹の墓所は、永年の雨風を受け、墓石の劣化も見られますが、かつての淵野辺村地頭の家格を偲ばせ、一族の歴史を感じさせる場所となっています。

（東部班 佐藤）



写真6 岡野氏墓地



写真7 旗本岡野家累代の墓誌

小田急相模原駅周辺地域の近代史を垣間見る

街なかの史跡・記念碑・石柱等を訪ねて往時を偲びます。この地域の開拓は、明治13年郷土開拓の先駆者平出富士太郎の呼びかけで、近郊の座間村等から7世帯が参加して始まりました。当初は通いでしたが、3年後新たに起した集落である**中和田新開**に居住しました。この場所は、南西―北東方向の折れ曲がった**府中道④**と南東―北西方向の**辰街道⑤**の2つの街道が交差している要所でした。(両街道についての説明の石柱が、図2の④鶴が丘歩道橋の南階段の傍と⑤相模台公民館の敷地内にあります。)

大正8年、開拓40周年を記念して**開拓記念碑①**と並んで前出の平出氏の**歌碑**が集落内に立てられました。記念碑には漢文で開拓の経緯とこれを立てた住民12人の氏名が書かれています。歌碑には“まきつけし一粒麦もかさぬればいく万石とつづる石ずえ”と開拓に掛けた思いが刻まれています。(①の場所は小田急相模原駅前信号の柱際、当初の位置からは移転)

開拓が始まって2年後の明治15年、日本の近代測量の起点となる相模野基線＝北端点～**中間点②**～南端点間約5.2km＝が設置されました。②の地点は、同基線の説明板(場所は座間市相模が丘2-17の東側、仲良し小道内)に示されています。20年後の明治35年には、基線の精度を上げるため、**百米(メートル)比較室③**(後、文部省測地学試験所と改称)が設置されましたが昭和の初めに廃止されました。その説明板が百米比較室の西端があった場所(相模台2-17-9のカーテン店の屋敷内)にあります。

以上の地理的状况を図3(大正10年測量)で見ますと、府中道と辰街道、中和田新開の集落、それに基線中間点、東西に長さ110mの建物である文部省測地学試験所の位置関係が分かります。また一带には桑畑(丫印)が広がり養蚕が盛んであったことを伺わせます。

昭和2年には、小田急小田原線が開通しましたが、この地域に停車駅はありませんでした。

昭和12年、陸軍士官学校(現キャンプ座間)が開校、翌年の昭和天皇の行幸に合わせて府中道が直線状に改修されました。通称「行幸道路」と呼ばれています。

昭和13年、臨時東京陸軍第3病院(現国立病院機構相模原病院)が開院し、折からの日中戦争の負傷兵の治療に当たりました。昭和天皇の**行幸記念碑⑥**が構内(病院正門を入った右手奥)に立っています。

同年に設置された小田急相模原駅と相模原病院までの辰街道(今のサウザンロード)は、この地域の中心的な商店街に発展しました。

戦後の昭和22年、**二宮神社⑦**(場所は開拓記念碑から相模大野寄1分)が創建され、尊徳の石像が立っています。(南部班 茅野)

(文中の丸数字は下の案内図の数字に対応)



図2 現在の地図



図3 大正10年測図地形図

※本ページの地形図は、国土地理院発行の2万5千分1地形図(原町田)を使用したものです。

発行連絡先 相模原市教育委員会 文化財保護課 電話 042-769-8371